

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

太平洋戦争中の1942年、三重県で生まれた。父は陸軍南シナ海の戦地に建築技師として従軍、フィリピンで終戦を迎え、戦後遅く復員した。その頃、我が家は占領下の農地改革で20町歩の農地が2町歩に減歩され、口に入るものと言えばさつま芋や大根、大豆などしかなかった。こころした時代に求められる仕事と言え、食物の確保と住まいの再建。父も農林業と社寺・和風建築業の「二足の草鞋」を履き、家族を養った。ただ、神社や庫裡などの設計は得意としていたが、商売は苦手だったようだ。

母屋は鈴鹿山麓にあった。農地と平原が広がり、四季の花や豊かな緑に囲まれていた。この恵まれた自然環境が建築家に必要な資質である大抵の一体観や、野山の四季の変化などを敏感に感じ取れる感性を養ってくれたのかも。さらに、有り難かったのは疎開して来た都會育ちの親戚縁者が我が家に同居し、彼らの持つ都会的なセンスを感じ取れたことだ。とりわけ都会の服装や生活習慣の違いは田舎育ちの私にとって大きな刺激であった。

昭和20〜30年代、日本の地方都市では長男が大学へ進学することは稀で、地元の高校を卒業すると、地元で職を求め、家を継いだ。しかし、私の父は「家業を継げ」とは言

## 建築界に生きよ！ それは夢か希望か運命か

わなかった。私はその頃、遠からず訪れる農地の荒廃を予感し、農学者か、企業農家を夢見ていた。そのため、普通高校から大学の農学部への進学を志していた。ところが近くに住む伯父が「父親の仕事を忘れるな」と私に強く迫り、やむなく津工業高校建築科に進学。卒業後は地元に残る覚悟を決めた。

それが一変したのは高校3年生の夏。中学時代(三重大附中)の同窓会で、かつての級友たちが有名大学への進学を語っていた。これにショックを受け、高校の担当教師に自分も進学したいと告げた。その教師は驚くことに、その後すぐに父を訪ね、私の進学を進言。父は「家督を継ぐこと、浪人、留年は不可であること」を条件に進学を許した。担当教師がなぜ、父を説得してくれたのか、分からない。ただ、一つだけ考えられるのは高校2年生の秋に近畿工高校建築連盟主催のコンペで連盟賞を獲得したことだ。その後、大学に進学し、大学生の時もいくつかのコンペで賞を頂戴した。今思えば、こうしたコンペ入賞が「建築家への道を進め」という天命が下った瞬間だったのかもしれない。憧れの竹中工務店に入社できたのも、コンペに入賞した実績が評価されたのだから。

建築物はその時代を映し出すレガシー(遺産)となる。それだけに建築家は悩み、苦しみながら一つの作品を創り出す。建築家たちに過去を振り返ってもらいながら、どうして建築家を目指したのか、何を見つめ、何を考えながら創作活動をしてきたのか、執筆してもらいます。06年に「星ヶ丘テラス」でBCS賞を受賞した経緯がある服部都市建築設計事務所服部力会長にご登場頂いた。

# 建築

## 余話

2

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

憧れの竹中工務店に入社したのは、1964年のこと。大阪本店で同期生260余人と共に、実務見習ならびに社人への研修生活が始まった。昼間は配属の各専門部署で実務を習い、夜は神戸市深江の研修寮で集団生活をおくった。平日は英会話やパソコン、習字などのレッスンがあり、先輩社員(役員)の講義をカリキュラムに従って受講した。休日はバスケットボールやテニスなど、好みのスポーツを楽しみ、夜はみんなで楽しく会食した。

こうした集団生活の中で、社人としてのマナーを自然に体得していった。そして同じ釜の飯を食べた同期社員との友情が深まり、その絆は太く、52年たった現在も多くの同期生と親交が続く。同社の



## 「お客さま本位の作品創り」はいまも息づく

創業精神である「信用を第一とし、信義を重んじ、堅実なるべし」は、多くの社員同様、私の仕事に対する基本的な姿勢であり、座右の銘にもなっている。

私行われているからこそ、日本を代表する大企業の中で、入社3年後、10年後の社員定着率がトップクラスにある所以なのだと思う。

同社の社風はいくつも優れた点があるが、特に感銘を受けたのは、学歴に関係なく、徹底した実力主義が貫かれていること。同時に進取の気風に富み、新しい事象をいち早く情報収集し、検討の上、実践していくこと。さらに新しいセンスを採り入れ、それを研鑽し、気品ある形で建築主に提供すること。こうした術は見事としか言いようがない。また、これらの社風が設計部や開発計画部にとどまらず、すべての部署、全社員に浸透していることに敬服する。

これだけ行き届いた社員教育が行われているからこそ、私が代表する大企業の中で、入社3年後、10年後の社員定着率がトップクラスにある所以なのだと思う。

06年にBCS賞を受賞した「星ヶ丘テラス」(名古屋千種区)

私は不本意ながら、家の事情で竹中工務店を入社12年目に退職した。父が緊急入院したためだ。しかし、同社で学んだことは今なお、私の仕事に退職した後に設計事務所を開設し、多くの建設会社の方々と仕事をさせてもらった。もちろんその中には竹中工務店もある。同社のみなさんと一緒に仕事をすると、自分が学んだ「お客さま本位の作品創り」の精神が、世代を超えて受け継がれ、今なお秀れた作品を作り続けていることを強く感じる。竹中工務店の方々と今なお一緒に仕事ができることは私にとって幸運であり、何か運命ともいうべきものを感じて止まない。

# 建築

## 余話

3

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

「建築の設計は住宅に始まり、住宅に終わる」。学生時代から、住宅に終わる。課題をいまでもはっきりと覚えてい

代の設計担当教授や設計実務の先輩から、こうした発言を何度も聴いた。大学で専門課程に入り、最初の設計課題は「都市近郊に建つ標準家庭のモダン住宅」であった。木造2階建て、延べ床面積120平方メートル、敷地面積150平方メートル、家族は夫婦と子供2人。所要室は主寝室8帖押し入れ付き、子供室6帖2部屋、予備室6帖床の間押し入れ付き1室(客室兼祭事用)および納戸(扇風機・座布団・ひな壇等の収納)で、居間・食堂・台所連結室(LDK)うんぬんと、50年以上前の設計

課題をいまでもはっきりと覚えてい



## 「住宅に始まり住宅に終わる」設計のプロを目指す

から神武景気旋風が都市から地方にも広がっていた。炊飯器・オーブン・ミキサーなどの家電製品は年々に増え続け、バイクや小型乗用車の所有台数もうなぎ上りという状況。温水器やシャワー付きユニットバス、水洗便所の温水洗浄便座付きなどの住居の普及も始まっていた。

住宅を取り巻く生活用品や家電の普及は、国民の生活の様態を著しく変化させ、社会現象にもなっていた。建築主個人の所得によって各住戸の生活内容も異なり、外観はより個性的なものが求められるようになった。建築主の要望にこたえるため、新しい住設機器展示会やモデルルームが各地に設けられ、設計者はそこへ足繁く通われないと客の要望にこたえられない時代になっていた。

森の中の家・M邸(愛知県)

好奇心旺盛な私は、各種専門誌の閲覧はもちろんのこ

と、住設展や建材展に足を運び最新情報をむさぼるように学習した。それが功を奏し、建築主の要望に即応できた。ただ、よほど住宅に関心があり、新しいものや美しいものに共鳴しやすい性格でないこと、「住宅設計は難しい」とも感じていた。

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

1975年のオイルショックで、世界経済は混乱した。わが国の経済も暗雲が立ち込めていた。私は以前から「もし自ら設計事務所を開く場合には『不況時』に開設しよう」と心に決めていた。なぜ不況時か。それは誕生したばかりの企業は、試行錯誤しながらヨチヨチ歩きで運営せざるを得ない。もし、世間一般の経済成長の速度が速ければそれについて行けなくなる。不況でスローな動きであれば、「新米企業」もゆっくりと成長できる。そんな思いがあったからだ。

75年8月、設計事務所を開設した。しかし、これはその時期を狙った訳ではなく、偶



然の産物でしかなかった。事務所を開設して間もなく、ある邸宅の設計話が持ち込まれた。それは地元財界人ご令嬢夫妻の「住まい」の設計・監理業務だった。英国帰りの三

## 大邸宅設計50件、その重責と醍醐味

西欧風の個人住宅

十代前半のご夫婦で、ロンドンでの魅力に惹かれ、現地から持ち帰った「The House Book / in England」なる分厚い本を渡された。「まずこれを読んでください。2カ月後に設計条件を出します」と。すぐに辞書を片手に英語で書かれた本を読み、建築主の要望に応えられるよう準備を進めた。出された設計条件は、1階は玄関、居間、テラス、食堂、台所を一直線上にすること、2階は寝室中心の間取りで、大きなクローゼットや庭の見える広いバルコニーがあること、赤いレンガの外壁仕上げで、テラスは広く、タイル貼りにしてほしいとのことであった。

英語の書物を読んだおかげか、設計はそれ程難しいものではなかった。完成した邸宅は当時としては一風変わった西欧風の邸宅で、地元では評判になった。これを契機に、個人的で総工費が「億」を超える(3億〜6億円程度が多い)豪華住宅をこれまで50件程度設計させてもらった。富裕層の建築主からは「バリールヒルズの中心部に建つライトのコンクリート住宅を見て来てほしい」など、予想外の注文が来る。その度に私は喜んでそこに足を運び、設計の参考にした。住まいはその建築主のプライバシーそのもので、隠し金庫の位置やトイレの使い勝手、持病のための施設配置なども相談される。こつとした極秘事項に配慮、細部まで建築主に満足してもらえる住空間をどう提供していくのか。住宅に対する豊富な知識はもちろんのこと、最も必要なことは「顧客との信頼関係」だと、つくづく思い識った。

設計事務所開設直後、仕事の内容は中規模の個人住宅やクリニック、社宅・学生寮の集合住宅など、住居系が大半を占めていた。10人の社員は、毎日忙しく献身的に働き、社員が一丸となって仕事に打ち込み、アトリエ内は充実感が漂っていた。

ただ、集合住宅の仕事は手間暇がかかった。特に問題だったのが日影規制。当時、日影規制の法律は不完全で、建物を建設することによって発生する日陰や電波障害のある範囲について説明会を開催し、該当する周辺住民から承諾の印鑑をもらう必要があった。周辺住民から出された要



望は、建築主であるデベロッパに説明し、承諾を得た上で、行政の了解も取り、図面を訂正した。それを次回の説明会に提出するという作業を何度も繰り返していた。最初のうちは社員も頑張っ

## 第1次マンションブームに生き、10年で方向転換

ていたが、地元説明会に間に合わすために日夜問わずの作業が続くと、さすがに疲労の色が濃くなってきた。やっとの思いで確認認可書を受領できた時は皆で安堵したものだった。

一方、建築主であるデベロッパは売り出し開始の広告を打てば、その翌日に即日完売。事務所で祝杯を挙げ、粗利23%達成と騒いでいた。当社は連日説明会の準備に追われ、先頭に立って住民の方々に何度も説明を行ったにもかかわらず、報酬は建築費の3%。着工後も、購入者の希望条件合致への訂正業務や、現場監理業務の開始準備、施工者との予算内での調整に四苦八苦し、最終的には赤字というケースも多々あった。

集合住宅 (三重県)

であり、仕事を選り好みするつもりはなかったが、どつしでも分譲マンションだけはやりきれぬということで社内の意見が一致、来年から全てお断りしようと方針を決めた。皮肉なことにその年の夏、千里団地H1工区(三重県)の1街区を再開発するコンペがありそれに参加した。大半が大手設計事務所という競技で、図らずもわが社が最優秀賞に輝いた。SRC造15階建て、2LDKと3LDKの間取りで、100戸の大規模集合住宅だった。丘の上に建つ45層の高層建築は当時、景観上も地域のシンボルタワーとされた。当社としても、集合住宅の最後の作品にふさわしいもので、その完成時には社員全員で祝杯を挙げた。これ以降、分譲集合住宅の設計からすべて手を引いた。この判断は今も正しかったと思う。

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

1990年前後、日本経済は目覚ましい発展を遂げ、先進国の仲間入りを果たした。国民の所得は向上し、急激な車社会が到来、生活様式も大きく変わりつつあった。主要街道の沿道には各業種の郊外型店舗が次々と建設され、新たな街並みが形成されていた。

その舞台裏では出店企業による商業店舗デザインナーの提案型コンペが行われ、われわれも数多くの設計事務所と同様にそのコンペに参加した。その一つにデニーズの店舗があった。デニーズは日本で事業展開を開始した時からの付き合いがあり、米国デザイナーによる基本設計の店舗を日本の法律に合わせて設計を

見直し、日本人の体形や好みに合わせてという先駆的な取り組みを当社で行い、数店舗



## 新しい時代への挑戦、コンペ必勝へ

の設計を受注していた。

デニーズはある時、各店舗ごとではなく、統一した店舗デザインを採用していく方針を打ち出し、デザインコンペを実施した。当社は多少過去の実績が加味されるものも期待していたが、全く容赦なく同一条件でのコンペとなった。当社は実績があるだけに面子をかけて、最良の提案を考えた。その努力の甲斐があった。最優秀賞を頂戴した。その時の喜びは今なお、忘れがたい。

その後デニーズの店舗を全国で130店舗近く手掛けたが、それは当社にとって大きな副賞をいただいたようなものだった。同時にこの受賞が思わぬ方向に広がっていく。ある日、ユニクロの店舗開発本部から当社に問い合わせがきたのだ。すぐに同社の柳井正社長と面談。東京渋谷神南町のSRC造地下1階地上4階建ての店舗設計の依頼を受け、その後も新しいタイプの店舗設計を何件か受注した。こうした店舗設計は当時、大半が店舗デザインコンペとして行われ、当社はメガネショップやドラッグストア、スポーツジムなどで、全国コンペで入賞し、実施案となり、数多く設計を担当させていた。

全国に展開したデニーズの店舗

デザインコンペは中堅幹部はもとより、若手社員にも設計ができる良いチャンスとなった。さらに、受賞できれば設計の企画から各種書類の申請業務、基本・実施設計、工事監理までほぼ単独で担当でき、若手設計者にとって大きな経験となり、将来に向けての財産となった。私自身もコンペが大好きで、そうしたチャンスがあれば、ぜひとも挑戦すべきだと今も変わらぬ気持ちでいる。

# 建築

## 余話

7

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

建築家は設計の図面を描くた。

だけが仕事ではない。想像力 日頃から建築家として、各  
さえあれば、いろいろな仕事 種の建物、内外装に使う多く  
に挑戦できる。設計事務所を の建材の組み合わせや、ユー  
開設して間もないころ、ある ザーの好み、流行の先取りに  
建材企画販売会社の創業社長 は自信があった。ただ、それ  
から商品開発の顧問に就任し てもらえないかという要請が  
舞い込んだ。しばらくしてそ の社長を訪ね「なぜ私なので  
しょうか」と、単刀直入にお 聞きした。答えは簡単。直前  
まで勤務していた竹中工務店 で、ある大手企業建材部の見  
本帳のデザインを担当。その 見本帳をご覧になり、「この  
見本帳のように業界の常識を 破った斬新なデザイン感覚  
で、当社の商品作りを指導し てもらいたい」とのことだっ



## 建材企画販売会社の顧問に没頭

ただでお引き受けして良いの 300億円に達し、名実共に  
か迷いもあったが、これも本 日本一の専門建材販売会社に  
業の勉強になると思い「商品 育ち、ブランドとなった。  
開発顧問デザインアドバイザー 義父が大手企業の経営コン  
」という仕事をお請けした。 サルタントをしていた影響も  
若干34歳の誕生日のことだっ あり、国内外の同業他社の動  
た。 きも調べた。会社に合うよう  
にその動向を咀嚼して提案。

その社長は事業欲旺盛な紳 度胸は群を抜いていた。  
士で、私の提案にも熱心に耳 踐された。そのスピード勘と  
を傾け、分かりにくい所はす 度胸は群を抜いていた。  
ぐに質問され、小生の提案を 度胸は群を抜いていた。  
理解し、受け入れられた。そ 度胸は群を抜いていた。  
の謙虚な姿を拝見し、こちら 度胸は群を抜いていた。  
も全身全霊を傾け全商品のデ 度胸は群を抜いていた。  
ザインアドバイザーを開始し 度胸は群を抜いていた。  
た。その結果、3年後には明 度胸は群を抜いていた。  
確に成果が数字に現れ、それ 度胸は群を抜いていた。  
は年々加速。アドバイザー就 度胸は群を抜いていた。  
任時に売上高が数十億円程度 度胸は群を抜いていた。  
だったが、数年後には500 度胸は群を抜いていた。  
億円を突破。すぐにその倍の 度胸は群を抜いていた。  
1000億円に達した。並行 度胸は群を抜いていた。  
して名証2部上場から東証1 度胸は群を抜いていた。  
部上場を果たし、売上高は1 度胸は群を抜いていた。

建材総合商社の支店事務所兼倉庫

300億円に達し、名実共に 度胸は群を抜いていた。  
日本一の専門建材販売会社に 度胸は群を抜いていた。  
育ち、ブランドとなった。 度胸は群を抜いていた。  
義父が大手企業の経営コン 度胸は群を抜いていた。  
サルタントをしていた影響も 度胸は群を抜いていた。  
あり、国内外の同業他社の動 度胸は群を抜いていた。  
きも調べた。会社に合うよう 度胸は群を抜いていた。  
にその動向を咀嚼して提案。 度胸は群を抜いていた。  
そのたびに社長は自社に導入 度胸は群を抜いていた。  
できるものを選び、すぐに実 度胸は群を抜いていた。  
踐された。そのスピード勘と 度胸は群を抜いていた。  
度胸は群を抜いていた。 度胸は群を抜いていた。  
何度か退任願いを出した 度胸は群を抜いていた。  
が、顧問職はその社長が他界 度胸は群を抜いていた。  
されるまで結局38年間務め 度胸は群を抜いていた。  
た。一つの企業の黎明期から 度胸は群を抜いていた。  
成長期を経て日本一に至るま 度胸は群を抜いていた。  
での成長過程をご一緒させて 度胸は群を抜いていた。  
いただいたことに感謝の気持 度胸は群を抜いていた。  
ちと、長年お手伝いできた 度胸は群を抜いていた。  
ことは私の誇りである。当時、 度胸は群を抜いていた。  
本業そっちのけでコンサル業 度胸は群を抜いていた。  
に打ち込む小生をみて、妻が 度胸は群を抜いていた。  
「あなたの会社も有能なコン 度胸は群を抜いていた。  
サルタントを雇ったら」と皮 度胸は群を抜いていた。  
肉っていたのが懐かしい。

建築物はその用途によって多種多様で、それは極端に言  
考慮すべき設計内容が変わると日用雑貨から飛行機ま  
る。住宅ならそこに住む人ので、さらに保管温度は常温か  
要望や使用勝手上の工期・予ら冷蔵、冷凍まで各種異なる  
算などの制約条件を充たしな条件が求められる。建物に出  
がら、快適な生活空間を実現入りの際に使われる荷物車  
できるように設計する。ただ、や、荷物用コンベヤー、エレ  
多くの建築物は人間が動き、ベーターも、扱う物によって  
働き、生活を続ける空間であ異なる。床荷量をみても、衣  
るため、結局共通条件として類や家具等は1平方メートル  
ヒューマンサイズで構成され0・5トあれば良いが、一般  
る。つまり、扉の大きさや階雑貨は同1ト、鋼材倉庫に至  
段の踏み面、蹴上げ、手摺りつては10ト15トにもなる。  
高さ、天井高さは建築物の用いまでこそ、ネット販売の  
途によって多少の差異はある普及などで全国各地で倉庫建  
が、それほど戸惑うことはな設ラッシュユとなっているが、  
い。私は35年前から倉庫建設の面  
ただ、倉庫は違つ！一般白さに惹かれ、各種の倉庫の  
的に倉庫は殻(建築物の外郭)設計に取り組んできた。多種  
だけを造れば良いと思われがちだが、実はかなり奥深い。  
倉庫の中に収納されるものは

インドネシアで手掛けた倉庫  
(ジャカルタ)

## 「奥深い」物流施設設計に嵌る



多様な床荷量の倉庫から、ジヤンボ機2機が入る大空間の倉庫も設計した。荷物エレベーターの床が5×5メートルのものも手がけた。都内で担当した倉庫は、一棟丸ごとワイン庫だった。このほか、延べ床面積4万平方メートルの自動車タイヤ倉庫や、延べ床面積3万平方メートルのロール紙倉庫、平屋3・3万平方メートルの鋼材庫等も担当した。倉庫と組み立て工場が一体のものもあった。

倉庫はその中に納める製品や、その納品方法、商品の出し入れ頻度などによって設計条件が異なり、机上で幾案考えても、最適な倉庫設計ができる訳ではない。建物構造材の仕様を考えることで、何年後かの施設解体時にリサイクル率を99%近くにもできる。もちろん工期短縮も可能になる。

長年、倉庫を手がけてきたおかげで、当社の設計は標準的な倉庫設計に比べ、コストも工期も10〜15%圧縮できる。独自技術があると自負している。倉庫に興味を抱く建築家は残念ながら多くないが、当社の設計主旨を事業主にご理解いただき、美しく仕上がった倉庫が完成すると、設計者冥利に尽きるのである。



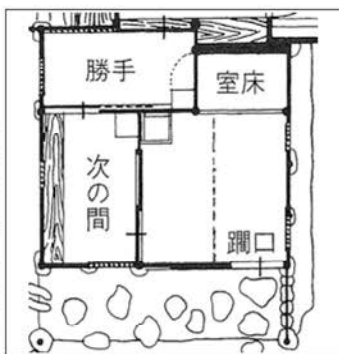
建築設計実務に携わり53年になる。多様な建築物の設計を担当し、その中には一般の建設業には数少ない「茶室」などの和の建築物もある。これまで茶室8件、能や日本舞踊の舞台2件、寺の庫裏など数寄屋風建築15余件がある。中でも苦労したのが「茶室」。流派の異いが色濃く、建築の根本的な問題について専門家に尋ねても明確な解答が得られないため、不本意ながら通例に従い設計を行った。なぜ、そうだったのか。茶の湯の基本であるおもてなしの作法とその実践の場である設えで、「茶室造り」に矛盾を感じていたためだ。その代表例が茶室の原点とされている待庵の設え。どんな高貴な客人であれ、客は庭



## 利休の茶室待庵とおもてなし

1 邸茶室 勝手口

利休の待庵 平面図



座する客の目線より高い位置にある。さらに、質素簡潔を旨とする設営の庵でありながら、小二帖の空間に、なぜ天井だけ手の込んだ3種類もの重厚な仕組みになっているのかなど、疑問点は多い。茶の湯は「亭主七分に客三分」「独座観念」など、禅や芸術の教義を背景にした自己修養の側面を大切にしている。招いた客がどれほどの満足を感じるかということよりも、もてなす側の満足を重視する。特に利休の「詫び茶」は、無駄なものを一切削ぎ落とした素朴、簡素、小形を理念とした庵となり、主観の強い原理主義的なもので、元祖としては価値があるが、どこか暗く、無理のある造りとなっている。現代の茶室にそれを反映させて良いのか。招待客に100%満足して頂くという西洋サービスに慣れ親しんだ現代人に馴染むのか。私はいろいろとおもてなしの心を設計に取り入れることにした。遠州は茶室に入りやすくするため、入門口を幾つも用意し、グループの人数によって対応できる最小三帖から四帖半、六帖等幾部屋も用意した。さまざまに「本来の表裏無し」の和やかな時間を共有できる空間を目指した。そうした客人に対する「おもてなしの気持ち」を設計に反映させた。これは茶室に限らず、私の設計思想の基本でもある。

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

私の故郷、鈴鹿山麓には東海道五十三次の宿場町「関宿」と、屈曲路の城下町の「亀山」があり、子供の頃からのおおの町の親戚に度々遊びに行った。その延長上の町、京都山科や、津市にもよく出掛けた。「宿場町と城下町」。町の構成や家の造りは違つが、両町ともにぎやかで、春・秋の祭りには多くの人が往来した。田園育ちの私には街の活気が魅力で、好きであった。大学の卒業研究に進む際、得意だった特殊構造解析ではなく、スケールが大きき、息が長い都市計画を専攻したのも、少年時代に町歩きに慣れ親しんだ体験の影響かもしれない。

竹中工務店入社4年目、同社技術研究所特別研修生に選



ばれ、都市再開発手法の研究に携わった。当時はまだ少ない街区単位の都市再開発がテーマであり、その後増加が予測されたため、その有用性を追求し、実施可能な手法の提案が求められた。あくまで理想都市造りの研究と考えていたが2年後、元の設計部に戻るとすぐにその研究結果

## 都市社会の中にEco・City

を実践に生かす仕事が続いてきた。

名古屋近郊の「豊田駅西地区再開発」と「刈谷市中部市街地再開発」の2件の計画を担当。本社開発計画本部の協力の下、現地調査や開発計画のコンセプトを創り、基本構想をまとめた。その際、主眼に置いたのが「Eco・City」という考え方だった。昭和40年前後、全国各地での公害が社会問題化し、地球環境の保全に国民の意識が高まる中、何とか街づくりを環境問題と融合できないかと考え、生活環境の改善を含む各種の施策を街区計画に取り込み、一つの提案とした。

当時は、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）削減という概念はもちろん、今のようなゼロエミッションもなかったが、街区や建築構成材の自然循環リサイクルという考え方を積極的に導入した。この2件の再開発

が実際に造られた時期は同社を退社していたため、最後まで携わることはできなかったが、街づくりの中に地球環境対策を採り入れるという考え方は時代を先取りしたものであったと自負している。それが数年後に、都市計画部門でBCS賞や名古屋都市景観賞を頂いた「星ヶ丘テラス」（名古屋市）や医療機関の方々に評価を得ている「医療村・津メディカルモール」の設計に繋がったのかもしれない。

街や建築物はその時代の人々の考え方や文化を映すレガシーとなる。それだけに建築家は時代の変化に敏感でなければならぬ。一見、建築とは関係のない未来型社会現象でも何かを感じ取って設計に生かしていく。若い建築家の皆さんには、そうした未来を予想する感性を養ってほしい。

服部力氏（執務室より）

※Ecological city <urban> Renewal Design Theory (むねの)